



平成18年10月21日 阿倍野青年センター「田辺寄席」にて

「師匠から破天荒と言われるけれど、今しかできへんことを一生懸命させていただきたい」。瞳をぐっと開いて一言一言丁寧に紡ぐのは、2005年2月にデビューした新人浪曲師・菊地まどかさん。娯楽の多様化の中で浪曲界に新風を吹き込み大阪で発祥した伝統芸能の伝承に勇む。その原動力は、「元気を与えられる浪曲師になりたい」という一途な思いだ。

20代最後の決断

「菊地～まどかと～申し～ます～」。昨年4月、新宿御苑の「観桜会」の席で小泉首相(当時)の手をぐっと握って声を張り上げた。「限られた時間で、どうやったら浪曲を宣伝できるかなと思って」。デビュー早々に「文化庁芸術祭新人賞」を受賞した逸材は根性も「逸品」だ。

幼い頃から父親に連れられて民謡などに親しみ、20歳の頃から河内音頭を歌い始めた。01年には成世昌平さんに弟子入りし、名取となる。各種大会で活躍する中、浪曲師・京山小園嬢さんの舞台を見て「ぐさっと胸に衝撃が走った」。

「まるで映画を観ているかのように、物語の情景が頭に浮かんだ。私も師匠のような味のある声を出せるようになりたい」という強い思いに突き動かされ、03年に弟子入り。「聴く側だけで終わっていたらよかったですけど、厚かましくも聴かせる側になりたいなと思ってしまった」とはにかむ。

次第に、正社員として務める医療事務の仕事と稽古との両立が難しくなり、「どちらも中途半端になって迷惑をかけるのは嫌」と8年間働いた職場を離れることに決めた。将来の不安、職場の仲間と離れる寂しさもあったが、それでも決意は固かった。

浪曲界の新星として

浪曲は浪花節ともいわれ、明治から昭和にかけて隆盛を誇った。三味線を伴奏に、約30分の物語を節＝唄と、啖呵＝台詞で演じる。プロの浪曲師として舞台上に立つようになり、「全部一人でせなあかん。まるで一人オペラみたい」と痛感し、師匠の偉大さを思い知る。

初舞台では聴衆の涙を誘う物語のはずが、自分自身が泣き通しだった。「客席で見守ってくれている人たちの顔を見たら、胸が苦しくなって...」。嗚咽を上げながら演じる彼女を、師匠をはじめとする先輩たちも温かく見守った。

浪曲界に差し込んだ一筋の光。そんな期待を背負って、路上ライブや入場料500円の「ワンコイン浪曲会」などに挑戦する。「今の時代にあった新作を」と現代の大阪が舞台の『たこ焼き屋の婿』などのオリジナル作品も演じる。「浪曲に興味を持っていただける機会を作ること。それが今の私の務め」と言い放つ。

今年2月には「咲くやこの花賞」を受賞。喜ぶ反面、「『もっと勉強しろよ』とお尻をたたかれているよう。さらに頑張らな」と気負い立つ。「まどかの浪曲を聴いたら嫌なことも忘れてしまったと言ってももらえるような力のある浪曲師になるために、今年も駆け足でいきます!」。有り余る情熱をほとばしらせる。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

(編集部注)

成世昌平さん:日本民謡「甲会」設立会主
「咲くやこの花賞」:昭和58年度から大阪市が将来の大阪文化を担う若手に一層の飛躍の期待を込めて贈っている賞

CLOSE
クローズアップ
UP

「咲くやこの花賞」受賞、浪曲界に燦然と輝く、元気印のなにわっ子

プロフィール

浪曲師

きくち
菊地まどかさん



1976年、大阪市東住吉区生まれ。96年から樽や舞台で河内音頭を歌い始める。2001年、成世昌平さんの甲会に入門、名取となる。富山テレビ番組「サンザワールド民謡大会」優勝(同年)を皮切りに、「西近畿民謡連合大会」優勝、「産経民謡大賞」優秀賞など次々と獲得。03年に京山小園嬢さんに弟子入りし、05年2月に浪曲師としてデビュー。翌年には「文化庁芸術祭新人賞」と「大阪舞台芸術新人賞」を受賞し脚光を浴びる。浪曲ファンの裾野を広げようと、路上ライブやワークショップ、ワンコイン浪曲会、若手3人組ユニット「新星浪曲 新宣組」の旗揚げなど、精力的な活動を展開する。今年2月には「河内音頭から出た歌唱力、節回しのある本格的な浪花節」が評価され、平成18年度「咲くやこの花賞」に輝いた。